

# 占いの聖地 生駒をゆく

樋口 淳

## 神々の山

占うとは、異界の声を聞くことである。たとえ、易占いのように筮竹をもち「周易」以来の知恵に頼ろうと、コンピュータ占いのように現代科学を駆使し、データを蓄積しようと、人知を超えた「因果」をつかむ不思議な能力がなければ、占いはない。

大阪と奈良の県境、河内と大和の国境に位置する生駒の山は、こうした「異能」にあふれている。大阪の中心から近鉄でわずか十分。この地には、商売、結婚、受験、命名、病氣、家相、移転、失せ物など、ありとあらゆる悩みを抱えた人が訪れる。生死の淵をさまよう大きな悩みも、日々の泡のような小さな疑惑も、人をかりたてる。

修験道の祖である役行者が修業したと伝えられる一帯には、「信貴山縁起」で知られた信貴山朝護孫子寺や「金もうけの神さん」

の宝山寺のような信仰のメッカ、修験道系の寺院から、滝や塚や祠まで無数の聖地がある。人は、病の折に医師にすがるように、人生に迷うと、この「かかりつけの聖地」にやってくる。大阪で「韓寺を歩く会」を主宰する曹奎通さん、カメラマンの藤本巧さんといったしよに、「辻占総本社」の瓢箪山稲荷から、「でんぼの神さん」石切神社の参道にひろがる「易者のまち」、生駒の谷筋ふかくのびる「韓国・朝鮮寺」という、三つの占いの聖地を歩いてみた。

## 総本社の辻占

瓢箪山稲荷は、大塚・鬼塚とよばれる古代の双円墳（瓢箪山）の西方にある。

この神社の占いは、黄昏時に辻に立ち、通る人の姿に目をこらし、語る言葉に耳を傾けて命運を知る「夕占」であったという。かつては、東高野街道に面した「巫女の辻」に

どっしりとした石の「占場」があり、そこで最初に見た人の姿、年齢、持ち物、言葉、連れの有無などを宮司に報告し、託宣を受けた。

たとえば、道頓堀の戎橋の寿司屋の先代が占場に立ったとき、むこうから乞食が「はらへった」といつてやってきた。そのとき、先代が受けた託宣は「ぜいたくなものでなく、誰でも立って食べられるものを商いなさい」。寿司屋を開いて大当たりした、というのである。出来すぎた話だが、道頓堀というシツクリ納まる。

現在の東高野街道は様変わりして、どこも私鉄沿線にも見られる商店街のアーケードと化し、ゆつくり通行人を観察しているひまはない。明治末から戦前の鉄道がひかれる前までは、年間三百万人におよぶ参詣客を集めたというのが嘘のようである。当時は、大阪から一番近い信仰の場として、徒歩や人力車でやってきた人々を相手に、三十数軒の茶屋や料理屋がたちならび、芝居小屋や色町もあつ

た。ところが電車のおかげで、お参りのあと、一泊ゆつくり遊んで帰ると言うパターンが崩れた。料理も遊びも大阪に帰ってからということで、歓楽街がなくなった。そして昭和三十年代から高度経済成長がはじまり、大阪のベッドタウンと化して、宅地化の波が押し寄せたのである。

「夕占は万葉集にも見える」と、瓢箪山の人々が誇るように、この占いは本格的である。しかし、瓢箪山神社が「辻占総本社」となったのは、いわゆる「読み辻占」のおかげである。この占いは「やきぬき」「おみくじ」「あぶりだし」の三枚セットで、現在でもわずか二百円。お買い得である。むかしは、これを年端もゆかぬ女の子が「おじちゃん、辻占こうて」と売り歩いた。ことに大阪の色町などでは、この商売が大繁盛したらし



瓢箪山稲荷の読み辻占

い。月に数十万枚売れたという。児童福祉法の制定で、これが禁止されて痛手をうけた。もつとも、この「読み辻占」を売り歩いたのは、少女ばかりではない。全国津々浦々を渡り歩く行商が、「河内の辻占」として引き受け、旅の先々で「読み辻占」を局留で何万枚という単位で受け取って捌いていった。夏は東北をめぐり、冬は九州を歩くというノンビリした商売があったのだろう。いまは、それも稲荷境内の自動販売機にとつてかわられた。

### 易者のまち

石切神社は、「延喜式神名帳」に登場するほど古い歴史をもつが、なによりも「でんぼの神さん」として親しまれてきた。「でんぼ」というのは、腫物のことである。駅前の大きな鳥居に掲げられた「ようこそ石切さんへ」という歓迎に誘われて、参道を下つていくと、両側に百軒をこす商店が立ち並ぶ。八百屋や魚屋などふつうの店もあるが、ほとんどが参拝客相手の商売である。なかで目立つのは、生薬屋。最盛時には三十軒をこえたというが、病氣直しの神さんにふさわしく、オドロオドロしい看板が目にはいる。なかには、「アカマムシドリンク」で財をなし、

「日本三番目石切大仏」と「大仏寺石切大天狗」という宗教施設をつくり、境内に当主自らの銅像をたててしまった阪本漢方の本店もある。この薬局の看板の大きさと開けっぴろげの富の誇示にびっくりしながら、境内に一步入ると、お百度を踏む信者が目を奪う。平時で数十人、縁日には百人をこす人々が、砂煙をあげながら、二本の石柱のあいだを行き来する。

この極彩色の空間にふさわしい迫力で並び立つ、もうひとつの「商店」が占いの店なのである。ざっと十五軒は下らない。「易者のまち」と称されるゆえんである。易のほかに、姓名判断あり、コンピュータあり。「大阪府知事認可公認」「近畿通産局認可」などというお墨付きを麗々しく掲げた店のかたわらに、辻に机と椅子をならべただけで、悩みを聞き、お祓いをする簡単な店がある。どれも魅力にあふれているが、屋根に大きな鈴を飾った、「金の鈴・銀の鈴」はひとときわあざやか。

店内では、常連とおぼしき客たちが茶飲み話をしている。年間三百五十万といわれる石切神社の参拝客を相手にはしてはいても、一見の客ばかりでは商売が成り立たない。期待を裏切らず、「よく当たる」とか「役に立つ」という評判を得て、馴染みの客をふやして店



パラソルを広げて参道の客を迎える辻占

がそだつ。大きく「命名」と記された扉のわきには「親は子供の本質を知りましょう」「教師は、生徒指導に役に立ちます」というポスターが並んでいる。

紫の衣をつけた店の主人、三井紫津子さんは、曹洞宗、出雲大社、金峰山、犬鳴山の加持祈禱師範資格のほかにも中学・高校教諭資格までもち、四柱推命も行うが、霊視を得意とする。修業したのは、石切にちかい長尾の滝だが、霊視の手ほどきを受けたのは、韓国・

朝鮮系の寺であるときいて納得がいった。

「人間が作り出せない大自然には、全部、神が宿っている」という。韓国・朝鮮式の神降ろしは、この神をすべて降ろせなければいけない。先祖の霊だけではなく、天の神、地の神、閻魔、氏神、琴平、地藏、ありとあらゆる神の言葉を語る「口きり」が必要とされる。霊能者の力は、「見える」「聞こえる」ことよりも、霊を成仏させることなのだ。苦しむ霊を癒し、人間の苦痛の原因をのぞくのが霊能者の真価である。

「易者のまち」では、さまざまの異能の人が、異界の声を聞いている。韓国・朝鮮式の神降ろしは、むしろ例外であろう。しかし、生粋の日本人である三井さんが、紫色の衣をつけ、韓国・朝鮮式の神降ろしをする。国籍を超えた異界の交流が、いかにも生駒にふさわしい。

### 韓国・朝鮮寺とはなにか

曹奎通さんによれば、生駒一帯の韓国・朝鮮寺の数は六十を超える。ここで行われるのはシャーマンによる「クツ」とよばれる神降ろしで、宗教法人の形式をとっているものは少ない。たたずまいも、民家と区別できないほどである。それでも、なかに入ると、簡単

な本堂、七星神・山神・海神をまつる三神閣、小さな滝などをそなえているのがふつうである。

「クツ」は、占いであり、神降ろしであり、治療である。健康、愛情、金銭問題などで悩む依頼者の訴えが、占い（霊視）によって重症と判断されると、日と場所を選んで行われる。悩みの原因となる霊を降ろし、霊の言い分を聞き、食事や金銭などでもてなし、災いをおこさぬように頼み、ふたたび霊界に送り届けるのである。「クツ」の最中にも、刀や銭や鉦かねをなげ、さかんに霊の意向を占う。赤、青、黄、白の布が、鮮やかにひるがえり、布の結び目がひとつひとつ解けると、死者の恨みも解けて、苦しみが癒されていく。

私たちが訪れた大興寺は、信貴山に至る谷の入り口にある。「クツ」の具体的な姿は藤本巧さんの写真にまかせて、儀礼を主宰する金萬宝さん（一九三〇年生）と妻の玄金石さん（一九三七年生）の話聞いてみよう。

二人は、済州島の同じ村の出身である。済州島では、男性シャーマンを神房しんぼうという。萬宝さんの父も神房であった。祖父は役人であったが、島に疫病がはやったとき献身的に働いたために早世した。後ろ盾を失った父は苦勞の連続で、やむなく被差別の神房職にたずさわることとなって、親類中から激し

く責められた。

萬宝さんも、賤視されるこの仕事をきらって、キリスト教や仏教に帰依しようとしたが、なじめない。そして二十七歳のとき、神が降り、狂気に襲われて神房をなぐり、大暴れした末、縛りつけられた。この発作を契機として家業を継承したが、一九六二年以来、漁船で日本への密航を企てる。三度失敗して、四度目によく成功して、大阪に住むこととなった。

神房は俳優のようなもので、いかに神をのりうつらせるかが第一である、と萬宝さんはいふ。泣くときには、一日中でも泣ける。親族にいさかいが起こったときは、たとえ神が降りてこなくても、調停につとめなければならぬ。韓国では、人が死ぬとその晩に「口きり」をして、死者の思いを聞く。これは、難しい。とくに仏が何も遺言せずに逝ったときは、親族は神房の言葉に注目している。「仏が乗り移り、『土地をどうしろ』とか、『だれそれに借金がある』とか、スルスル言葉がでるときはいいですよ。ところが、なかには変な仏がいて、じつと黙って何もいわないことがある。私もシンドイし、仏さんもシンドイし、エライ目にあいますよ」。生きている人に個性があるように、死者にも個性がある。当たり前なことだが、これは霊を降ろ

してみないとわからない。

萬宝さんの妻、玄金石さんの人生も波乱にとんでいる。十八歳のとき、密航船で済州島を離れた。二度の結婚で十人の子を生み、二度の離婚の後、神が降りる。四十四歳のときである。

その気もないのに、近所の人にさそわれて、大阪の成田さん別院にお参りにいくと、とつぜん手が震えはじめた。不動明王に見据えられたのだ。その日は三千円の小さな御札を買って帰った。

当時、家で裁縫の仕事をしていたが、その御札が気になってしかたがない。しだいに水をあげ、蠟燭ろうそくを買い、線香をたて、こつそり祈りはじめた。すると、一本の蠟燭がゆれて百本に見え、光のなかを不動明王が刃をつきつけながら、近づいたり遠ざかったりする。夜中には、見たこともない大きなお爺さんが座って、左の耳に「ふう、ふう」と太い息を吹きかける。

そうこうするうち、どうしても滝にあたりたくなつた。山に行くのは恐ろしいので、家中の鍵をしめ、「不動明王さん、三日のあいだ、毎日三十分だけ滝にあたります」と誓い、水が額にあたるようにホースを固定して、たらいの中に座った。ところが、水が体中をまわる。手のひらから、胸、肩とあがつ

て、暑い熱が出る。死んでもいいと思うと、自然に目が開き、ちょうど三十分たつていた。これが一日目。

二日目に水を浴びていると、天からずっと青い葉がおちて目に映る。三日目には、その青葉が脳のなかに「ぶわー」と入ってくる。そして剣をもった不動明王が刃をつきつけて行ったり来たりする。「不動明王さん、不動明王さん」と呼びつづけると、水が急につよくなって、体中をまわる。「これで、死んでもしかたがない。嫌だ、嫌だといっていた罪だ」と思っていた。霊が降りてきたのである。不動明王がついたのだ。

こうして玄さんは、知らず知らずのうちに、星神を祀り、山神を祀り、海神を祀っていく。誰に習いもしないが、形が自然にできてくる。神の声がきこえ、ものが見えるようになった。左の耳から神が語り、右の親指が動いて、なんでも分かる。親指が自然に動き「これが海」「これが山」と教えるのだ。家系にシャーマンはいないから、隠しておきたいのだが噂が広まり、依頼者が増えていった。シャーマニズムの手ほどきは、誰からも受けたことがないし、生駒山も信貴山も知らなかったが、偶然、山で金萬宝さんのお祓いをしていてという噂を耳にした。同じ村の出身なので、小さい頃の記憶がよみがえった。二

人は再会し、不思議な縁で結ばれた。

十人の子どもは、みな無事に育ったが、誰も神の降りた者はいない。玄さんは「できれば、いない方がいい」と思う。苦労が多く、眠れない。「やればやるほど疲れる。やればやるほど周りが嫉妬するし、敵が増える。神経は疲れるし、戦争のようなものだ。悪霊と戦わなければならぬし、勝たねばならない。クツの効果があれば、なにを言われるかわからない。クツの衣装はきれいだけれど、やってみたら大変。拝師は長生きしないよ」。

### 日本に根づく韓国・朝鮮の文化

生駒が、六十にあまる韓国・朝鮮寺を受け入れた理由を考えると、まず、古代からの伝統が思いつく。周知のとおり、古代の日本は朝鮮半島から多くを学んできた。この地には七世紀後半の白鳳時代に百済王の一族によって建立された百済寺をはじめ、本来韓国・朝鮮系の寺が少なくない。

山を神聖な場所、神の居る場所であると考え、韓国の朝鮮と日本に共通していることも重要である。たとえば、韓国東海岸の江陵で行われる端午祭では、大関嶺の山奥の木を伐り、それを依代として山神を降る

す。これは日本の祭りの原型と通底する。

生駒やその周辺には、滝や清流のほかにも木や岩があり、韓国の村や町に現在も見られる民間信仰の基礎が生きている。韓国・朝鮮寺の中核である七星閣に祀られる星神（北斗七星）に対する信仰も、「妙見信仰」として、古くから生駒に見られる。

しかしこうした伝統に加えて、もっとも重要であると思われるのは、生駒の立地条件である。大阪、神戸、京都など、生駒周辺には日本在住の韓国・朝鮮人の四割以上が集中している。これほど信仰の原型を共有する山が身近にあれば、在日の、ことに心の悩みや病を抱えていた女性が集中したのは当然ではないだろうか。



韓国・朝鮮寺を開いた人たちの多くは、滝を訪れた女性であった。彼女たちの周囲には、占いと託宣を求めて信者が集まる。山中であれば、大きな音をたてて「クツ」を行っても苦情は出ない。そこが自然と、世俗的利害やしがらみを離れた女たちの心と体の憩いの場となっていたのである。

(専修大学教授)